
愛の証明

詩架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の証明

【Nコード】

N7892Y

【作者名】

詩架

【あらすじ】

ある日彼のベッドで目を覚ますと、私の左足首に足枷が取り付けられていた。疑問に思った私は部屋に現われた彼に理由を訊いた。「君に消えて欲しくないから。どこにも行って欲しくないからだよ。私はなんとか説得しようとするが、彼は納得してくれない。」

そして始まった監禁生活。

そんな彼と私の結末は……？

R15レベルの表現があります。

ただしこれはあくまでそういう表現が苦手な人のための表記です。で、そのところをご理解下さい。内容はシリアスです。色々詰めの良いところがありますがよろしく願います。

他サイトにも投稿させてもらっています。

ある日彼のベッドで目を覚ますと、私の左足首に見慣れない、金属製の輪っかが取り付けられていた。銀色のひんやりとした輪っか。その輪っかからは鎖が伸びており、たぶんベッドの足首と繋がられているのだろう。足を動かすと、じゃらりと音が鳴った。

拘束されている。

でもどうして？

私は首を傾げる。理由を知りたくて周囲を見渡してみるものの、彼はもう起きたのかこの部屋にはいなかった。

静か。

右を向けば私が寝ていたベッドからメートル弱離れたところに、明るい色調のカーテンで覆われた窓が見える。カーテンからは少しだけ太陽の光が透過されていて、朝になったのだとわかった。

私は掛け布団を身にまといながらベッドから降り、窓へと近づいた。音を立てる鎖に改めて拘束されているんだなと実感させられたけれど、長さに余裕があるのか簡単に窓まで辿り着けた。

カーテンの境目に手を入れる。窓は閉まっっていて、鍵が掛けられていた。

閑散としているような気がしたのはこのためかと、私は一人納得する。まだ暑さが残るこの時期、普段は窓を開け放っているから、大通りに面した彼の部屋には自動車の走る音とかがよく聞こえるのだ。

でも今日は窓が閉まっている代わりにクーラーが作動していた。

「おはよう。起きていたんだね」

ドアが開く音とその声に私は振り返った。

「おはよう」

平常の穏やかな眼差しをした彼に私も挨拶した。

「ねえ、これは何？」

私は自分の左足首に取り付けられた輪っかを指差し、彼に尋ねた。
「足枷だよ」

彼は当たり前のことのように言った。

「どうして私に足枷を付けたの？」

「君に消えて欲しくないから。どこにも行つて欲しくないからだよ」
「いなくなつたりなんてしないよ。こんなことしなくても私はあな
たの傍にいるのに。会社とかがあるから四六時中はさすがに無理だ
けど」

私は困り顔で微笑む。

「嘘だ！そんな言葉、信じられない。君もいなくなるんだろう！？」

彼は声を荒らげた。瞳が不安定に揺れ始める。

「本当だよ。私はあなたの傍にいるよ」

私はベッドの上を横切つて降り立ち、彼の左頬に右手を添えた。

「ね、私はここにいるよ」

彼の体温を私が感じているように、彼にも私の温かさが伝わって
いるはずだ。

「……ごめん。でも君を解放するわけにはいかないんだ」

悲しげに顔を歪ませ、私の右手を掴む彼。

「……」

ギョツと痛いくらい私の手を握り締める彼の様子を見て思う。

本当に私が消えてしまふかもしれないと恐れているんだなって。

「ねえ、とりあえず服を着る間だけ外してくれない？このままだと
恥ずかしいから。あなたが望むのなら、また私に足枷を付けてもい
いから」

私は鎖を持ち上げ言った。

「いいよ。服を着る間だけなら」

彼はズボンのポケットから細長い鍵を取り出すと、私の足枷を外
してくれた。

「ありがとう」

私は礼を告げ、服を身に付け始める。

彼は私から離れていくれた。でもドアを塞ぐ形で立ち、私を射抜く視線は彼が本気だということを示していた。

どうしてこんなことになってしまったんだろう？

私は頭の中で思い当たる節を探してみる。彼は元々不安定な人だったけれど、何か原因があるかもしれない。

私は半袖のブラウスの袖に腕を通す。

「あつ」

心当たりを見つけて、私は小さく声を上げた。

ちょうど一週間前。私は自動車に轢かれそうになったのだ。

彼と週末、晩御飯を食べに行った帰り。周囲への注意力が散漫になっていた私は車が走って来るのに気づかず、横断歩道に飛び出してしまったのだ。間一髪のところまで彼が私の腕を引き戻してくれたおかげで事なきを得たのだった。

その後彼は私を抱き締めて離さなかった。「大丈夫だよ」って彼の背中をトントンと叩いて、ちゃんと無事だよって示しなだめることで、やっと解放してもらえたのだった。

私はスカートに足を通した。

彼は交通事故で両親を亡くしている。彼の両親の場合は自動車同士の事故だったらしいけれど、それとダブって見えたのかもしれない。

だから私がいなくなってしまうと思ひ込んでこんなことをしてしまったのかな？

「着終わったよ」

私は彼にそう告げた。彼は再び私の左足首に枷を取り付けた。

またベッドの足首と繋がられちゃったなんて漠然と思っていると彼はベッドの方の足枷を取り外した。

私が驚いた表情を浮かべると

「朝食ができているから一緒に食べよう」

彼は外した足枷付きの鎖を持ちながら歩き始めた。当然私に取り付けられた足枷も引っぱられるから、転ばないように慌てて歩き始

めた。

彼の家は1DKのアパートの一室。部屋を出るとまずアイボリー色の絨毯、その上に置かれているテーブルと椅子が目飛び込んでくる。

彼はテーブルの足に足枷を繫いだ。

テーブルにはすでに朝食が用意されていた。トーストに野菜サラダ、オムレツにコーンスープ。

朝なのにメニューが豊富だ。

彼はいつも、少なくとも私がいる時はたくさんの料理を作ってくれるのだ。私は普段一人の時は、トーストだけだったり食べることにすら面倒で、朝食そのものを抜いてしまう。だからそんなに食べなくても平気なのだけれど、以前彼にそう話したら「きちんと食べないと駄目だよ」と怒られてしまったから、彼といるときだけはちゃんと取るようにしているのだ。

私はスプーンを持ち、コーンスープを掬う。所々に浮かぶ、つぶつぶ。インスタントじゃなくてきちんとともろこしを使って一から作られている。

手の込んだ料理。オムレツはチーズ入り、サラダはレタス、キャベツ、きゅうり、トマト、人参、と野菜の種類が多いし、トーストは程良い焼き加減だ。彼によると、前もって準備しておくから大変ではないそうだが、私にはとても真似できない。

彼と付き合い始めたばかりの頃は私も料理を作ってあげたりしたのだが、あまりの出来映えの差に今ではすっかり彼に任せっきりだ。「トーストには何を付ける？」

紙パックのレモンティーを私のカップに注ぎながら彼は言った。

「マーガリンだけでいいよ」

私はそう答えた。レモンティーをコップのきっかり八分目まで注ぐと、彼は冷蔵庫からすぐにマーガリンを取り出した。そして私のトーストに薄く均一に塗った。個人的にはもっとたくさん付けた方が好きなのだが、身体に悪いからと言って彼はそれ以上決して追加

してもさせてもくれない。

私はトーストを少しだけかじってからレモンティーを口に含んだ。朝食の時、私が紙パックのレモンティーを飲むことを習慣にしていることを知っている彼は、必ずそれに合わせて用意してくれるのだ。向かい合わせで私と同じように食事をしている彼。

いつもと変わらない。彼の家に泊まった翌朝の日常風景。

白い長袖のカッターシャツを着た彼と、半袖のブラウスを着た私。長袖と半袖。

なんだかちぐはぐでアンバランスだなと、私は意識する度に思う。今年の夏、彼はずつと長袖の服しか着ていなかった。

「ごちそうさまでした」

全ての料理を食べ尽くした私は、両手を合わせて言った。食後の挨拶であり、作ってくれた彼に対する感謝の気持ちを表した言葉。

彼にはまだコーンスープが残っており、飲んでいた。毎回僅差で私の方が早く食べ終わるのだ。

私は自分の分の食器類とグラスを一つにまとめて持ち、立ち上がった。

洗い物なら私だって彼と同等にできる。

私は台所へと歩く。けれど流し台まであと一歩というところで、左足が引つ張られた。左足に視線を落とすとそこには足枷があった。鎖がテーブルの脚からまっすぐ、ひもを張ったかのように伸びきっていた。

私は拘束されていたのだった。

「勝手に僕から離れるな!!」

忘れかけていた事実を思い出した瞬間、鋭い怒鳴り声がとんできた。それと同時に背後から抱きすくめられた。

両脇の下から伸びてきた手が、私の胸を触り始める。

「やっ、ま……」

待って、と最後まで言えなかった。

私は持っていた食器類を落としてしまった。それらは床に当たり、

音をたてて割れた。

早く片付けないと、と頭の片隅で思ったものの、彼が私の胸をまさぐり続けるため動けなかった。それどころか力が抜けそうだった。

「やあ、やめて」

私は声を上げ、抵抗する。何回も彼を受け入れてきたし、触られるのも嫌いじゃないけれど、心の準備ができていない。

「あ、やめ……」

制止の声をなんとか再び掛けようとして、私は言葉を飲み込んだ。後ろから感じる彼の息遣い。どこか確かめるかのように、執拗に私の胸を中心に愛撫を繰り返す手つき。

彼はこの行為によって私の存在を確認しているのだ。私が確かにここにおいて、決して消えはしないのだということ。

私は抵抗するのをやめた。今拒否すれば、彼をより不安にさせてしまう。

彼の手が私のブラウスのボタンを外し始めた。そしてはだけさせられ露わになった私の首元に、彼は顔をうずめる。

「ひあ、んっ」

首筋に走る快楽を伴った鈍い痛み。同じような痛みが連続して私を襲う。

「あ、あっ、あん」

彼のモノだつて印を付けられている。

意味を成さない嬌声を漏らし、どこかぼんやりとする意識の中、私はそう思った。

彼は普段決して私にキスマークを付けたりしない。何かの拍子で付いてしまった時には、私を傷つけたとひどく自分を責める。

そんな彼が私に自分の痕をたくさん刻んでいく。こうまでしないと私の存在を感じられない程、彼は追い詰められているのかもしれない。

私に触れる手と這わされていた舌が離れた。私はどうしたのか理解できないまま、乱れた自分の息を整えようとする。

カシャン。

鍵が外れる音と共に、私に取り付けられていた足枷が床に落ちた。
「きゃっ」

彼が後ろから私を再び抱き寄せた。そしてそのまま私を引きずるような形で移動し始めた。私は彼に引かれるまま、バランスを取るために足を後ろへ後ろへと出すしかない。

テーブルの横を通り過ぎた。彼は片手で私を捕まえたまま自室のドアを開けた。

「……ッ」

私はベッドに放り出された。身体に衝撃を受けたけれど弾力があって柔らかかったから別に痛くはなかった。

私が何か反応を示そうとするよりも早く、彼は馬乗りになってきた。
「んんっ」

手首を押さえつけられ、唇を塞がれた。貪るように荒々しく、一方的に口内を蹂躪される。掴まれベッドに張り付けられた手首が痛かった。彼にしては乱暴で、私は少しだけ悲しくなった。

彼が口を離した。酸欠になりかけていた私は、過呼吸気味になりながら空気を取り込む。けれど息を整える猶予もなく、彼は私のブラウスに手を掛けた。

首筋、鎖骨、胸へと噛みつくようにキスされたり愛撫されたりしながら服を脱がされていく。時折視線が合う彼の瞳には不安定な揺れと、確かな欲情の色があった。

昨日の夜もしたのだから、私としてはせめて今晚までは身体を休めたかったが、この様子では拒否することはできない。拒絶すれば彼を傷つけることになってしまう。

彼が肌を重ねることでの存在を実感し安らぐことができるのなら、私は抱かれてもいい。それで彼が私を信用してくれるのならいくらでも受け入れる。

私が身にまわっているものを取り除きつつ、彼もカッターシャツ

を脱いでいった。私と触れ合う時以外決して長袖の服を脱ぐことのない彼の肌は日に焼けていなくて白い。普段は隠れて見えない、左腕の肘から手首にかけて巻いてある包帯も露わになった。

もう何か月も前からずっと巻き続けている包帯。「どうしたの？」と訊いても彼は「大したことない」の一点張りで、何も教えてくれなかった。

今もまた気になりかけたものの、彼に喘がされ理性を奪われていくうちにその思考は霧散した。

二日目(1)

だるい。全身が鉛のように重たい。そして何よりも眠たかった。ふわふわと浮上しかけた意識を、私は眠気からまた闇に沈めるために寝返りを打ち、掛け布団を握り締めた。ふかふかのベッド、頭に当たる枕の柔らかい感触、包み込むような布団の温かさに私はまたまどろみ始めた。

「ッ」

声が聞こえてきた。なんて言っているのかうまく知覚できなかつたけれど、私を呼んでいるみたいだ。私はよりギョツと目を瞑る。疲れているの。もう少しだけでいいから眠らせて。

「ッ、ッ、ッ」

けれど呼び掛けは止まなかった。さらに声と共に肩も揺さぶられる。私を起こそうとしているようだ。

身体を動かして反応を返すことがひどく億劫で、私の意識は夢と現実の間を浮遊し続ける。

「ッ、起きて」

だけど徐々に意識は現実に戻って来て、私へ掛けられた言葉が徐鮮明になっていく。

「起きて、起きてくれ」

懇願するような口調。必死だけど優しく私の肩を揺らし続ける手。私はハツと気づき、目を覚ます。すると視界に、今にも泣き出してしまいそうな顔をした彼が映った。

「……おはよう。どうしたの？ そんな顔して」

上から覗き込んでいた彼の頬に私は横になったまま手を伸ばし、触れる。温かさが私の指に伝わった。

彼にこんな表情をさせてしまうのだったら、眠気に負けずにもっと早く起きればよかった。私は心の中で後悔する。

「ごめん、ごめん、ごめん……」

彼は自分の頬に添えられた私の手を握り締め、うわ言のように謝罪を繰り返した。

どうしてそんなに謝るんだろう？

私はまだぼんやりとしてあまり働かない頭でそう考えた。彼に手を握られたまま私は目だけを動かす。

彼の部屋。カーテンから太陽の光が透過して明るいから、今は朝のようだ。さらに首を傾けると、ベッドサイドテーブルの上にはきちんと畳まれた私の服が下着を含めて置いてあった。私は伸ばした腕に視線を戻して、自分が裸であることに気づいた。

昨日はどうしたんだっけ？

私は異常に回らない頭で思考しながら身体を起こした。だるくて眠ったはずなのにまだ疲れを感じる。それに身体の、特に下腹部が重くてつらかったし、膣がじんじんと痛みを訴えていた。

「もう謝らないで。私は別に怒ってもあなたが悪いとも思っていないよ」

私はそう言いつつ、記憶がまだ混濁していたがとりあえず彼をなだめるためにベッドから降りようとする。シートと擦れ合う耳慣れない音を聞き、その時になって初めて私は左足首のひんやりとした感触に気づいた。

金属製の足枷。拘束具。

「あっ」

私の意識はようやくクリアになった。

昨日の朝、私がいなくなってしまうことを恐れた彼にこの足枷を取りつけられたのだ。そして朝食を食べて、その後不安定になった彼によって半ば無理矢理、ずっと抱かれていたのだ。

いつもなら一度で終わりなのに、昨日は何回も何回も一方的に犯され続けた。体位を変えたりしながら、ひたすら私の存在を確かめるように彼は身体を繋いできた。私は喘ぎ、ただただ彼を受け入れるしかなかった。

身体を重ねていない時も、愛撫されありとあらゆる場所にキスさ

れた。彼は片時も、まるで放した瞬間に消えてしまふかのように、不安げに瞳を揺らし私を求め続けた。

夜に一度だけ、彼は平常

「ねえ、服だけ着させてくれる？」

私は掛け布団で身体を隠しながら言った。彼の気を逸らすためでもあつたし、鬱血した痕がたくさん付けられた私を見て罪悪感を覚えて欲しくなかった。

「うん、いいよ。服を着る間だけならね」

昨日と同じように彼は足枷を外してくれた。『服を着る間だけ』という限られた時間だけだったけれど。

私は上半身から手早く服を身につけていった。そして最後にスカーフトに足を通し、着終えた。昨日と同じならばまた足枷を取り付けられて、彼に連れられ食卓に着くことになるのだろう。

「着終わったよ」

私はドアの前まで離れていてくれた彼にそう告げた。彼は昨日と同じく私に足枷を付け直した。やっぱり今日もこのまま拘束された状態で過ごさなければならぬようだ。

「朝食、もうできているから一緒に食べよう」

「あ、その前に一つだけお願いがあるの」

私は彼にそう言った。服を着ている途中から急激にある感覚が込み上げてきたのだ。

「何？」

ベッドに取り付けられた足枷を外していた彼は顔を上げた。その声は穏やかだったけれど震えていた。

「あのね、トイレに行かせてくれない？」

頼むのがちょっと恥ずかしかったけど、私ははっきりと言葉にした。こればかりは他に言い表しようがない。

「……いいよ、行こうか」

「ありがとう」

ベッドから外した足枷を持ち立ち上がった彼に私は礼を告げた。

「礼を言われるようなことじゃない。君のは人間として当然の欲求だよ。僕は感謝されるようなことなんて、君に何一つできていやしないんだ」

彼は足枷を強く握り締めると歩き出した。私も転ばないようにその後が続いた。

部屋を出て、彼に連れられトイレに向かった。

トイレのドアを彼が開けてくれたので私は中に入った。彼はそれを確認すると、扉を閉めているようにしてくれた。『ように』と例えたのは実際には私の足枷から伸びる鎖によって、完全にドアが閉まっているとは言えないからだ。

ドアにきつちりと挟まれた鎖。普通に扉を閉めただけではすぐに開いてしまう。だからドアと鎖が食い込みあったままなのは、彼が外でしつかりと扉が開かないように押さえられていることを示している。

人間としての尊厳を守ってくれる辺り、彼はやっぱり優しいななんて私は便座に座りながら考えた。

ただ、用を足している音を聞かれていると思うと羞恥心で顔が赤くなりそうだった。

トイレの中はカーペットが敷いてあり、便座とペーパー入れにはカバーが掛けてある。消臭剤も置かれていて、掃除も行き届いており清潔だ。

これは何もトイレに限ったことではなく、玄関、ダイニング、キッチン、お風呂、寝室。彼は家中を塵一つない状態にいつも保っている。女の私なんかよりずっと綺麗好きなのだ。

私は立ち上がった。取っ手を捻り流れていく水を眺めながら私はあることに気づく。

そういえばお風呂に入っていない。

クーラーの効いた部屋に閉じ込められていたとはいえ、ずっと一方的だったけれど彼と抱き合っていたのだ。汗をかいたりしていきつと不潔だ。

「ねえ、お風呂にも入りたくなっちゃった。丸一日洗っていないから私、汚いと思うの」

トイレを出た後、私は彼にそう言った。

「ごめん、すぐに沸かす。入るのは朝食の後になるけど」

「いいよ。ご飯、冷めちゃうもんね。ありがとう」

「礼なんか言わないでくれ。僕の配慮が足りなかったんだ。いや、もともと君は自由にしているのに、それを制限している僕がいけないんだ」

彼は自嘲気味に呟き、鎖を強く握り締め、私に背を向け歩き始めた。

ぐいぐい上に引かれ気味の足枷。

それは彼が鎖を自分の方へ必要以上に引き寄せている証拠だ。引かれる鎖は彼の不安の強さを表しているように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7892y/>

愛の証明

2011年12月17日03時10分発行